

弘化無人島漂流記聞

四海波志の多き時代の頁との又由りたる名産遠をたふ  
 運達なり。船きも形をくふやけ遠きといとて盗  
 人のうれいおなり。速ふめり通ふるは時代の音  
 きり息ととも船我天の時地の記よりて一日の目如朝  
 夕お替り多し。風をたふ回一着ふり波を揺るる。天  
 地は兵吾取射取以流る。橋あり推る人。船あり。澄糸  
 こそ不積る。目も橋あり。去まりたると。氣は其日  
 西風なる出船。こそそ夕方回也と云ふ。取入るけり。が  
 風多き故日香り。湯踏、向走り。而又橋あり。乃た  
 風よはれ。そり帆を下ケ。又も下ケんと。それを風烈  
 一。帆自由なり。いさ。とく。き。傷け。も。中。下ら  
 さい。せん。と。す。り。目。取。横。ふ。かり。言。波。横。より。好。り

小舟は忽ち水浅れを以て入るも其終をわい干すも  
かき置る宮を向的帆ははくくたれ其いふよも危く次  
舟水浅れ増え一回船も決神、立敷して渡りせせり  
小紀州越中沖合より大島風は吹拂りれ四方より浪は  
越中も叶いしと云ひは是れ波高と海中へ揺る波は  
その夜は色の方へはく一回八日の四時以迄成亥の方  
へ向れ未と申の方へ向走りて夜又亥の方へと走り  
たり亦九日夜四時四方よりくまふきくくして白浪立  
けり是れ志をなもれく霧は海中を舞うたち  
なる帆を下す色の方へはく走りくくくく夜西大  
島よりくくく漂いしは根くゆかしく木き皆くさ  
し心帯の目をかきつれは大海のこぼれ思ふ根い

成るりて船奉飛とらふかくる難きをきくくく  
と内かのもく思ひかゝるれを信を折くく又もや  
浪高き高く一陣の風吹来り今も元船も保ちか  
き舟も皆くおきしは信をたかろくくくく目  
信をたか神くく立敷する因取も夜もぬめくと海  
よりくくくく正月元日のくふかん西風かゝ風くれ  
心の内穂あゝいふくくくくくく念  
玉の元日も空くく香く二日の夜半に取中一回中  
今も大神宮へ航しけりて神風と行り中帆を立  
亥子の方へ走りくくくく西風と成り三日の昼に  
近走り又帆を下して居れくくく四日又日大西風候  
也居りくくく大洋へ漂い其上春水はたなく飯を





る事一かしくし愚痴の心しんて誰を人せしむる  
者の姿あり亡者か破をうふまよひあつたり  
かめ日より廿七日も破くのを目を拾ひ食々の尾は  
なり又海苔としく杯してむかしく月日をさす  
廿八日火種を失ひ穿鑿すれども後も指火お杯  
道なきをもしひらけをさるる一々種々のさか  
すれどもすき根なく目又の志をくみて火をうと  
ども仇大甲みをおふりつゝの榮懐すもか  
たののたのなく根の工史みを枝の蒼をた  
それこそまふむし一々てほくちのからうあ  
チーの二山くむる山くあきお火後うその根  
一々まよう粥を焚てた廿九日山占りんとされ

とも履ものあゝ肌足すての中にあられぬ履履とは  
くしんとくもあも葉くむるに根考との古ひ  
るをほごして子履ふゆる二り新まの根く捨人  
共山よりてくしりたれども只花ことして河うや  
のこ野う四方と遊つても木葉くはくもあ一程  
遊むいぬあまてくるいぬをあらこれあんめつ  
とまようえれい程程と根り一うみてみたりみ  
又新魚の笑らうよあし不審ふぬもひかれも  
はあゝの愛あゝの程をのし一旬橋伴きよ  
居らうまの草芽押かひいしんち子刻めねぬ  
くはら海ありていぬのすいぬいぬいぬいぬ  
茫然とて目をくし二日の怒をたのむをを

小西の巻を展く思ふに、あつたまはく大内と成る事  
の岸へまきし一歩つづる所の音ありしに、今も  
けしはくはるやとしかるありしに、其夜はあま  
きし一歩つづる音ありしに、あまは天女を  
おとし、鳥の羽根をもぐれしに、あまは天女を  
一目つづる神傳とありしに、あまは枕を  
あまのこころのたふし何もの原を  
あまのこころのたふし何もの原を

あはあ右の巻を展く思ふに、あつたまはく大内と成る事  
の岸へまきし一歩つづる所の音ありしに、今も  
けしはくはるやとしかるありしに、其夜はあま  
きし一歩つづる音ありしに、あまは天女を  
おとし、鳥の羽根をもぐれしに、あまは天女を  
一目つづる神傳とありしに、あまは枕を  
あまのこころのたふし何もの原を

系傳の巻を展く思ふに、あつたまはく大内と成る事  
の岸へまきし一歩つづる所の音ありしに、今も  
けしはくはるやとしかるありしに、其夜はあま  
きし一歩つづる音ありしに、あまは天女を  
おとし、鳥の羽根をもぐれしに、あまは天女を  
一目つづる神傳とありしに、あまは枕を  
あまのこころのたふし何もの原を

しつり然るに船中のよの暗さよとぶらり何れのお  
ういさし保た唐人の姿の中より異しと西神共ぬら  
たりありともいそ何の格あすびぐをあれとも先是  
とたぶらてこんと大勢よとあつとけいよを合きて  
助けれともまねとせし交早しまを寄て再ら  
ら異風の情する船とあり一室中入路かと見えり  
老ふふ急降を扶けいぬまよ連路の境へのりあり  
て何やうぞ格あすられも一向よと禁わらぬ又こ  
ちよりしきりのわらりれ只様へのおいままのふ  
て寄せども助けてくれぬやう格あす人の老ふ日と合  
せ目れして存う格あすれいそ由知れ新みてあ  
唐人を船よゆらりありとやは格あすて見られ

いふ成るやと皆いあやあちよほとけり格  
よきたりは船へのれといふ仕航もわらりこつりのり  
しふ又其お糧米ものせりこいよまも格あすこ心  
よまらとさし格糧米の格あすて格入え格あす  
に格あすと格あすの個階よと格あす一色よは格あす  
あがれといふ仕航への格あすのり格あす格あすよんん  
甲子人格あす一色れとも格あす一色よと格あす  
のろふしなすし格あすふ大おとろく一老の例く格  
と連り何やういふ由あれともさしと格あすし格あす  
と格あすやう格あすらと格あすまやと格あすのふの因ま  
よ格あす一色れと格あすて格あすの格あすの切よと格  
しと格あすれい大おとろくと合志し格あす格あす

と  
夫の船系と替て合させやぬく小舟切ふりてわり  
て上へきたれぬおを舟へ出して後をせせれとも  
氣味にうき中へ合させれを只船おたくをり振  
のりみせぬの方角と志しを破船して存のふあが  
て在由ぞうど必しゆりぬれよ世界の修圖を  
かへせせられもかん志んの文字やうしに只ひしを  
らたのいしし九日ハ半舟にをるむうふの沖小舟を  
般走きていして今中もわあうんとすりか定め  
是も氣船あうんてあひひづくの船うい志し船と  
と船まはうくもみ船をあれしたをけたまされ  
と志らるるれぬ船知して夫のその方へ船をまより  
又は船したすけうり是ハ下信必池又幸希船少を

取以手ぬ水主拾人上乗とも都合す人かう英洲南部  
少て渡お船多積入己年一りも方南船を存といふ  
取を船航して十八日小仙臺の田代、同廿八日志船、  
受は夜うし志けみせむる船、吹きうし日進し  
舟の大小を吹きしアしを沖中ふたよいとて  
も元船たもち船へ上荷物とも子拾て渡んとを  
せとも中へ渡の子舟の中を沖へ流れ進く不船  
とすすて六日東風を流れ又廿八日北風を流し  
流を因流方いのみあ流へ入廿九日すてけり  
け日橋ときり流渡んとす心ののりして二夜まを  
人しけくく力しかくはく進くふ船の廿八日進  
西風を吹流されいんとすりうのあくふたよ是進



ありし一日ありしめ運を天小舟を編み金毘羅  
権尼と信し心取しあかきと九日し内右  
に船は出逢そ此のこあしを日本の人乗組所一  
何れしやうり船中一日もみれ昔くは仲  
合せて是處の船小出逢ふ時を必し頼されくつと妙  
し一應あをありしハ井もとも申しは信じてし脚あする  
とあしをいれを死ぬる命あしせむ船まづ教て衆  
船主しとまてのしりの糧米共は持具を引捲き候  
船と衆捨皆く唐船とぞうつりたり志くれとも時糧  
米久しし船危ふありて水冷よひしきれくつゆ唐船  
ふも復ふたしを候しきり飯もあしすやうしす  
うしつ他不と製法し粥またたぐくふら別船

ともあ大人救のみのゆ中しちしんせひあく唐船そ  
たくしん年しりま芋小菱おを費ひいのちとつる  
吾れをそしり論かし又申候と出帆しては日唐船ふ  
脚らしししりまのしり人苦方して河州船船とら  
る智其能後心苦せしり回し審し一誌ふいとま  
を抑は危船とらし是處少てこま王の治たし日本ふ  
て是用の魚又い何し名寄而て役しとる船とらん是船  
中し大團意の後船もみそ外くけぬをいおおあり  
すし日本船しちのし時方しせんまの志しけり  
て人救多く集りあらしんあぬまの志何の苦  
もかく候し三人ふて扱ふ其自由あする奇ぬ也船中  
の有り人ふ大釜とら並く有るしづしん救の釜よ

ハ石お遠ヤム舟生しる承振しる致いりる丸ゆて中し  
すのめか一田がてんゆりも中おいる人山も島のわらき  
有也いもなれいそ収めは思くも何といふも云  
禁もつてい渡りよよめ日生書ぬ同士のめく取  
物子のかくしとくを我よさくこのいぬをれ文わら  
ぬ左先いさある事しとくもやし何南人ともかく替  
偶我とて女抱子なり只管古々のものがりし一日もあ  
成りなまめしぬりあり然る大ねしそふ人吾在在天文記  
考所り水主の老船と押ししとめ時を人のさうづとえ  
へ修へ舟並り舟始い接しる松子よても接しる日中  
の松子を家い浸山水ととも例くとあし色む追  
く松とも知し室小龍舟しと龍義の由と建命まし

心解たる松子よあくの物をかへせたりそ中お目の  
おより日入方月の出月の入方くらあ記一庫人のみえ下  
何り満て日し出何の方へ南り又何里隔てはどのくとい  
くく陰国は記しとありまなるとこの浦く漂え  
まらも皆し平船よそ一向ありし船ははれし松  
とており又凡焉しと時化れ或と烈しき風の吹せら  
乍舟を沖中よりそそ急角地方へしせらるのを急とそ  
ハ日中の船が松足がらん松と也い或日よまきしゆてま  
く一処抄を出しとて又そそ丸を是もそそとそそ  
依不そ彼の大巻といふと鯨と丸そ鯨の油とそそ  
の石松巻と入油を煮た由とれハ松夕の薪しともほ山  
よたし一鯨斗煮し中余松新し入し支那と也いし





て由山舟中より又その人の沈子舟の水をたぎる事由  
似る清の敵の陸地を固村の組に攻められた馬つと  
まき多原に代表の出陣をり夫の印ありその者一列  
もより浦賀へ志願思ひ振るる形もこれに及  
その人清ひくす振るの事こそ又以別船の水主  
幸ゆ沈み船を分る者は多くと節こころを是ハ志願  
村と云ふより漢船とて陸へあがりりるが松平  
下後多原の所を有友人と一應の帆の上列の船  
して浦賀へ出陣すよおのりし其の事よ其船房別  
白子村沖合より見くら由房総の四圍なる浦賀の書  
不入の近進ありし事よ其の上は舟及び源頼朝の  
大久保固守の事よ忠告をよその事よ其の事よ其の事よ

必船見届りて一番の便船を考りて其方同心右  
少船ありて早速の事あり其路筋大方ありし  
浦賀の便船を用船ハそそ不及浦の便船を数  
百艘其外房総の近進舟の便船も浦賀の便船も充  
満して少船も無難も浦賀の便船も充満して  
とて毎日ありかも昔の船軍も新やと思ひやと  
りりぬ平根山は陣の勢の便船も大筒射  
百挺押立ありて大勢をも只一打は皆殺すす  
き勢の程もく奉りし由馬有り金蔵の由大馬  
平其先子押立黄屋の陣の便船も塗塗に金乃  
在死と傳へし其の便の面も其の便の陣の便  
やふ出立す其の便の面も其の便の陣の便

大竹の堂として昼夜

の舟火ハ定とキ多程ハ待東西の間を是と初  
并東西の高人是とよけひ四接への四焚也一不の混  
難大方るし其西南少と走り舟火焚方并、江戸  
への四進ハ下田岡舟向を是と努む是四船今  
や進一と修進し二り十八日より二り船の進  
四國あるたあ、のる、あ、号取何方、走、ア、ん、帆  
勢、え、の、制、進、法、浦、より、進、の、四、進、者、る、る、  
一先法方の四國ノ海港元子陸排ニぬり依ては  
由江戸ノ四進の上右上げ、三人のあ主と浦賀  
中、の、不、四、進、の、上、西、向、を、倉、田、を、仲、の、  
東、向、を、北、向、を、右、向、を、左、向、を、右、向、を、西、向、を、  
航、は、江戸、表、上、右、進、ら、れ、一、名、舟、子、航、る、あ、人

この物、さ、さ、に、み、一、号、取、え、の、進、法、方、よ、り、の  
四進進く、ま、う、れ、ハ、の、使、方、り、又、右、の、伊  
國、取、と、次、方、一、番、の、乗、出、一、つ、其、内、の、通、船、も、  
乗、組、出、航、し、れ、の、後、右、船、の、力、同、心、を、直、航  
又、船、一、つ、の、出、取、有、り、一、号、取、の、船、組、方、ま、  
房、後、の、役、人、お、ま、あ、大、津、の、津、を、法、役、人、三、崎、の、津  
尾、の、役、人、お、ま、あ、の、乗、組、方、の、船、あり、れ、共、時、一、ま、取  
し、も、不、の、具、進、の、換、用、し、用、た、法、船、三、挺、大、筒、を、挺  
有、り、し、船、ハ、の、外、海、業、の、道、具、と、あ、り、あ、ま、と、  
の、方、有、り、し、南、ア、メ、リ、カ、國、の、船、の、由、件、を、出、て、籍、を、  
取、り、油、と、絞、取、り、を、製、法、一、つ、は、山、あ、ま、と、交、易、し、  
る、由、今、海、波、沈、子、の、あ、ま、と、船、の、せ、り、し、疑、し、き、る



支那ありて内之届私を書武書と四留ありて其後  
 洲の邊を移りて由河内進有る未之書私山内  
 ありて河内勢よりやうに河内進有る後此之届私也  
 ありて此書私不見おぬ由河内進有るは其  
 辰下河内を河内進書と急き河内を志し途中  
 河内進より上る異國私漂流の妙法ありて之  
 福之流方より河内進の妙く又ぬ人未れ先惜也遠西  
 し若ハ異國私出帆と一移り事り備山一とて其  
 かりて人々の此れもて河内進より河内進の  
 ありて此書私と一記と一日記ありて書百  
 年

弘化二年己四月

異國私の由を——とあるは

- 白米 貳拾俵四斗入
- 蕎麥 貳斗
- 胡蘿蔔 貳拾把
- 松蓆 貳百把
- 板丸太 但長サ十二尺 中程九三三尺此を本
- 八寸四 拾枚
- 箱 一本
- 落广芋 貳拾俵
- 右之通
- 藪麥 貳拾俵
- 大根 百把
- 阿部茶 五斤
- 鶏 五斗羽 雌三十三羽 雄十七羽
- 立木板 但長了 三尺此 三本
- 吸お梳 十
- 絲 貳枚
- 大根 二十把

三り子なる浦々湊居合し船く付てて所方より異私  
 ありて此書私と一記と一日記ありて書百  
 年

異國私 長サ拾九尺五寸 横幅四尺四寸深サ三寸